



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

胎児減数手術をめぐる

作家：住谷由美子

医者が全身全霊を捧げて行う「手術」は人の命を救うためである。でも「減数手術」は「減数中絶」とよばれて然るべきではないか。現在、約二十の医療機関でおこなわれている。一体誰にこんな権利があるのだろうか。

私達の国は、世界に先駆けて、一九四八年墮胎を認める優生保護法を制定しました。このニュースレターを手にしているあなたは、中絶反対者かもしれません。おそらくそうでしょう。

一九四八年当時、日本は大変な時代だったと聞いています。ことに女性達にとっては！私は、いかに、中絶反対であっても、この時代の、女性だけが負わねばならなかった、苦しみを思うと…その人は、自分のおなかで生活していた赤ちゃんを殺したという悲しみの上に、更に、刑罰までたった一人で背負ったのです…この歴史を単純に、非難することは避けた

いと考えています。だって、プロ・ライフ運動の目的は、たった一つでも、今日の、小さな命のともしびを守ることであって、決して誰かを責めることではないのですから。

さて、一九九五年の現在、この国では一年間にだいたい、三十万人の赤ちゃんが生まれます。それに対して平成五年に優生保護法のもと中絶された、生まれる前の赤ちゃんの数はおよそ三十八万七千人余り。でも実際はこの数字の二倍から三倍の赤ちゃんが命をなくしていると言われています。そして、今までに一億以上の赤ちゃんが優生保護法の法律のもと闇から闇に葬られて

います。ちょっと信じられない数字で、このこと一つとっても、今、私もあなたも生きていることが、文字どおり、いかに有り難いことだったかが分かりますね。胎児にとって最も危険な場所は、母親の胎内である…残念だけれど、これは事実のようです。

一方で、医師達は、子どもが欲しい女性の希望をかなえようと、受精補助薬を発達させてきました。排卵誘発剤や、IVF-ET、いわゆる試験管ベイビー、でも、この言葉は赤ちゃんにとってはあまり素敵ないメッセージではないですから、体外受精と呼ぶべきでしょうね…については、すでにおなじみでしょう。

もし、家族の基盤の第一は愛であると、当事者や、周囲の人間が本当に理解していたら、状況はずいぶん違ったものとなっていたかもしれません。でも、現実の私達の社会は、どうも、家族の基盤の第一は血縁そして経済…この偽りの価値観に長いこと振り回されてしまっています。「社会の罪だと思えます。」IVF-ETによって生まれる赤ちゃんは、わが国の場合、年間約千人です。ところで、この25%から30%がふたご、みつご、よつごといった多胎妊娠なのです。一回のお産で二人以上の赤ちゃんが生まれるのを多胎と呼びますが、比率は民族によって決まってい

るのです。日本なら、ふたごは百二十五万の出産につき一万五千人、みつごは一萬の出産につき一組、五つ子なら五千万から一億の妊娠に一回という具合です。ところが技術的な生殖医療によって、この十年でふたごが二倍、みつごが2.7倍、よつごが6.7倍、五つ子が4.2倍の比率で増えました。(資料・厚生省

研究班。五つ子は、一九九三年だけで七組も生まれました)これは何を意味しているかと言いますと、例えば医師が母胎に、よりたくさんの方の受精卵を戻していることを証明しています。

一九九五年九月十三日号のNEWSWEEK誌によれば、アメリカ国内ではこの方法の成功率は18.9%だそうです。それでも希望者はこの十年で八倍にふくれあがりました。(資料・PANNAK)わが国では、IVF-ETは医療機関に登録制が

義務づけられていて、これらの情報は学会がきちんと管理していますが、一番安価と推定される、大病院でも一回で約三十万円の費用がかかります。おまけに、受精卵は戻す数が多いければ多いほど妊娠率が上がるのです。

欲しかったんだから、何人だつていいじゃないか。そうです、未熟児医療が進歩して、小さく生まれる多胎児のリスクも減ったことは人類全体の喜びですね。ところが、医学の進歩はこんな問題を私達に突きつけました。減数手術です。

減数手術というのは、多胎妊娠をした場合、胎児の数を妊娠中に減らす手術です。もともと多胎妊娠が母児両方にさまざまな合併症をもたらす易いことから行われるようになってきたのですが、具体的には、超音波を用いながら減数する胎児に塩化カリウム

を注入するのが多く用いられています。

この減数手術は、世界ではいろいろな理由でされている国が多いのです。手術をする女性は複雑な思いでしょう。

今年七月、受精着床学会のシンポジウムでは、この減数手術をめぐる、五人の提案者が立ちました。四人はこの手術に賛成、ただ一人しか反対しませんでした。

ただ一人の反対者、この方は医学者でした。もし医師が、例えば、IVF-ETで戻す受精卵の数を減らせば、又、例えば、他の生殖補助医療を、医学そのものの進歩にあわせず、もっと社会の各方面の声を取り入れて応用したら、減数手術をまだ必要と感ずるだろうか、そう言われたのです。又、今これを許すことによって、遺伝子診断の発達が、どの子だけ産むかを、性別や、胎児の状況に

よって決める、そうした、人間の命の差別になりかねない発端になると警告したのでした。

私はこの方の研究室に行き、納得しました。皆さん、私はその時はまだ、中絶反対論者ではありませんでした。でも、減数手術が実施される状況をなんとか、回避せねばならないと考え至りました。

減数手術賛成論にこういう考え方があります。それは、減数は少なくとも一人以上赤ちゃんを産むのだから、中絶、つまり妊娠の終結ではない。だから、優生保護法にも抵触しないのだというものです。おつりの計算は速いけど、買物に行つたことのない子どものような意見で恐れ入りますね。こういう方々には、やはり、生命尊重を誰かが教えてやらねばならないでしょう。

「食事と水を

断たれた人々」

「マージョリー・ナイバートには食事を求める権利はない」と裁判で判決されました。そして4月6日、マージョリー・ナイバートはフロリダの療養所で息を引き取りました。ナイバート家の家族弁護士は、彼女が脳卒中になる3年前に、絶対にチューブによる食事は拒否すると彼女が言っていたことを明らかにしています。彼女は脳卒中が原因で療養所に入ったわけですが、医師達は口から食物を与えた場合、気管に食べ物を取り込んでしまうのではないかと恐れていました。それ故、彼女は全ての食物を断たれました。2週間後、彼女は看護婦の腕に触れ、「何か少しでも食べるものをくれませんか?」と頼み

ました。フロリダでは、患者は生きるために、例えば口頭であっても前言を撤回できると法律で決められています。それにも関わらず、裁判官は彼女のその要求は不当であるとし、その結果彼女は死にました。

「医療依存者と身体障害者のための国立法律センター (National Legal Center for the Medically Dependent and Disabled) の総括法律顧問であるトーマス・マーティンは、ミシガンで起こった事例を報告しています。脳に重度な障害を持った男性が食べ物と水を求めて戦っているということでした。この男性は口頭で食べ物を要求し、現在、州の最高裁判所で、その男性に食物を求める権利があるか否かを決定しようとしています。

チューブによる食事やスプーンによる食事さえ医療行為に分類されています。アメリカの五つの

州では、医者には患者の意志を逸脱し、「道徳的医療行為」に基づく処置をも逸脱する権利があると法律で定めています。作家クリストファー・マーティネットは次のようにコメントしています。「マージョリー・ナイバートが療養所に入った時、彼女はそこが道徳的にも医学的にも無法律地帯であることをほとんど知りませんでした。特定の規則もなく、「患者に食物と飲み物を与えるべきか否か」を医者や弁護士や裁判官が最終的に決断できてしまう場所だったのです。」

NRL news 4/24/95

医師の提案

年若い母親が一才ぐらいの小さな男の子を抱いて、診察室に入って行った。医師の前に座ると、彼女はこう言った。

「先生、今私困っているんです。先生なら何とかして下さると思って。実はこの子はまだやっと一才なのに、又妊娠してしまったらしいんです。私、次の子をそんなに早くは欲しくないんです。」医師は少し考えた後、こう言った。「それで私にどうしろと?」「まあ!中絶したいという意味に決まっているじゃないですか。」

医師はじつと黙ったまま考えていたようだが、やがて口を開けた。「もっといい方法がありますよ。もし、そんなに年近い小さな子どもを一度に二人も持ちたくないとおっしゃる

のなら、こうしましょう。私はあなたの膝の上ののっているその子を殺しましよ。そしてお腹の子の方を生かしておきましょ。つまり、わざわざ手術なんかするより、目の前にいる子どもを殺す方が手間がかかりませんか。それに私にしてみれば、どうせ殺すのなら、どっちを殺してもたいした違いはありません。しかし、お腹の子どもの方を殺すには手術しなければならぬから、あなたの身体上の危険性を考えれば、目の前のこの子を殺したほうがいいでしょう。」

当然の事ながら、その若い母親は椅子から飛び上がり、膝の上の赤ん坊をしつかり抱え込むと、「人殺し」と叫び始めた。

医師が一言二言かけた言葉で女性はすぐに落ちついた。彼は、自分が今提案した殺人と、彼女が最初にもちかけた胎児の中絶

は、どちらも悪徳の行為なのだと言って、彼女を納得させたのだ。もし、両者に違いがあったとすれば、被害者の年齢が多少違うという事だけなのだから。

(Pro Life Action News 9/94)

かけがえのない生命

今、この瞬間にも、地球上のどこかで、神は尊い小さな生命を造り出しています。神は、私達人間をこの世の初めから、おそらく永遠に見ておられます。そして新しく形作られた生命は、男の子であれ、女の子であれ、母の子宮の中で安らかに育まれ、たくさんの可能性を秘めています。もしかすると、この子はガ

ンの苦しみから人々を解放する治療法を生み出すために、神が私達に与えた使者かも知れません。また、偉大な指導者となつて、世界の貧困を解決するかも知れません。また、大國の指導者となつて、戦争している国々に和解を促す役割を果たすかも知れないのです。

この子は、しかし、無限の可能性のある世界を知ることはありません。なぜなら母親が、自分の決断の重大さに気付かないまま、目先の都合だけで過ちを犯してしまつからです。そして、医師が、小さな患者の存在に無関心なまま、冷酷無情にも、ただ金のためだけに中絶してしまつのです。

この名もない、顔もわからない子どもを私達は知りません。この子の泣き声を聞く事もなければ、涙をふいてやる事もなく、腕の中であやすことも

ありません。しかし、この子の死について深く考える事で、命の真の尊さを理解することができるのではないでしょうか。そうすれば、この子も天国から見て、自分の死が無駄ではなかったと分かる事でしょう。

「デニス・パピン」

養子を選んで

良かった

私は十九歳の時妊娠し、生まれた子を養子に出しました。この時中絶を選ばなくて本当に良かったと常々思っています。出産後、カトリック社会サービスセンターに行つて子どもを養子手続きのことを問い合わせました。

昨年、私は三十九歳となりました。二人のすばらしい子どもに恵まれていきます。センターから電話があり、かつて養子に出した息子が二十歳になり、実の母親である私に会いたがっていると伝えてくれたのです。私はこの日が来るのをずっと待っていました。夫も友人達も私の過去を知っており、心から賛成してくれました。子ども達は、血のつながった兄がい

ると知つて大騒ぎでした。

息子は立派な家庭に育ち、すばらしい人生を送っていました。彼の養父母も、息子が私に会うことに賛成していました。息子は、自分の実の両親がどんな人なのか知りたかつたのです。私への手紙の中で彼は、自分と私の二人の娘達は自然の絆で結ばれており、誰も間に入ることはできないのだと書いてきました。そして、息子にとつての最善を考えて、愛し合つている夫婦に彼を預けた私の決断に感謝してくれました。彼の養父母もまた私に感謝しました。

私のこの話が、同じような立場にいる女性に少しでも役立てばと祈っています。妊娠した当時、私は自分が子どもを育てるには未熟であることを知っていました。しかし、中絶に代わるすばらしい方法はあるものなのです。

ふじまひ...

「中絶が道徳観と無関係とみなす言動がもたらす結末」

遠くない未来、この世に存在すらしなかつた一個の母胎から赤ん坊が生まれる事が可能になるだろう事に我々は今疑いのない確信を抱いている。この世に存在すらしなかつたという言い方は、まあ適格ではないにせよ、とにかく、生存する権利も、成長する機会も、結婚し子どもを作る資格も与えられなかつた存在から、とでもいおうか。その結果、女性が一度も自分自身母親になる事なくして、孫を持つてしまふ事もあり得るわけだ。そんな困惑させるような奇跡的な事が、スコットランドのとある医師の発

見によって可能になりつつある。この医師は、墮胎された胎児の卵巣から卵子を取り出し、人工的に受精させ、不妊症の女性の子宮に着床させ、順調にいけば出産できる方法を発見したので。彼のこれまでの実験はネズミに対してしか行われていないが、イギリス医療協会は、近い将来人間にも臨床実験が出来るようになるだろうと予測している。

ていうミネソタ大学の倫理学者、アーサー・キャプラン氏も又同研究に対して異議を唱えている。

しかし、中絶を道徳的に黙認している限り、この不徳な研究を押し止める事は不可能であると結論づけざるを得ない。現存する法律は胎児に関する考え方をリミットのない物にしようとしている。墮胎された胎児を手術で切除されたポリープと同価値のようなものとしているのだ。しかし、ポリープは人類の子孫を生み出すのに何の役にも立ちはないが、墮胎された胎児の卵子の使用という行為は、子宮内で育っているものは、成長した人間と遺伝子的には全く同じほどの完璧な、母親から独立した生命体だという事実を中絶賛成派の人々は考えて欲しい。

死んだ人間から別の生命を取り出すという考え

には心騒がず邪悪な物を感じず。でもなぜ邪悪なのか。死人から生命をかすめ取るような事を始終していなから、道徳的には充分に耐えつると一般に受け取られている状況があるからだ。

死んだ人の器官を利用して生きている人に役立つ行為に制限はない。あらゆる科学目的のため、死体を使用する事がある。墮胎された胎児の組織を使つて、医療の研究をするための連邦基金にお金を出す事にすらもう慣れてしまつていて。これは最近クリントン大統領が前任者とは逆の立場をとつて行政上の命令で可能にした法案である。なぜ、人は皆この最新の医療の革新に恐怖を感じているのだろうか。一つ考えられる理由は、通常ドナーは、自分の器官を差し出す前にドナー自身の同意が必要であり、もし本人が生存して

いなかつたとしたら、少なくとも近親者の同意が必要とされるからであらう。胎児には同意する事もできない。しかし不思議な事に、胎児の脳をパーキンソン病の治療に使う事にはさしたる障害になつていないようだ。人の遺伝学上の身体の寄贈は重大な意味のある事であり、それ故、同意がとりわけ不可欠である。

しかしながら、中絶に抵抗を感じない人々さえ、この実現しそうなクローン人間再生じみた行為に不快感を募らせずにいられないだろう。ポストン大医学部で法律及び医学と倫理学の責任者であるジョージ・アナス氏は、この研究のもたらすところを、あまりにグロテスクすぎると本当だと思えない」ともらしている。又、墮胎された胎児の遺骸を他の医療研究に日常的に使用し

死んだ人間から別の生命を取り出すという考え

死んだ人の器官を利用して生きている人に役立つ行為に制限はない。あらゆる科学目的のため、死体を使用する事がある。墮胎された胎児の組織を使つて、医療の研究をするための連邦基金にお金を出す事にすらもう慣れてしまつていて。これは最近クリントン大統領が前任者とは逆の立場をとつて行政上の命令で可能にした法案である。なぜ、人は皆この最新の医療の革新に恐怖を感じているのだろうか。一つ考えられる理由は、通常ドナーは、自分の器官を差し出す前にドナー自身の同意が必要であり、もし本人が生存して

いなかつたとしたら、少なくとも近親者の同意が必要とされるからであらう。胎児には同意する事もできない。しかし不思議な事に、胎児の脳をパーキンソン病の治療に使う事にはさしたる障害になつていないようだ。人の遺伝学上の身体の寄贈は重大な意味のある事であり、それ故、同意がとりわけ不可欠である。

必要とする人々に余すことなく供給するためにのみ妊娠を考える事について話しているかもしれない。そしていつかは、胎児を培養して成長させる事が機械で出来る日が来たら、そついった目的のためにのみ、胎児を育てる養殖場のような物が出来るかもしれない。

しかしながら、中絶に抵抗を感じない人々さえ、この実現しそうなクローン人間再生じみた行為に不快感を募らせずにいられないだろう。ポストン大医学部で法律及び医学と倫理学の責任者であるジョージ・アナス氏は、この研究のもたらすところを、あまりにグロテスクすぎると本当だと思えない」ともらしている。又、墮胎された胎児の遺骸を他の医療研究に日常的に使用し

死んだ人間から別の生命を取り出すという考え

死んだ人の器官を利用して生きている人に役立つ行為に制限はない。あらゆる科学目的のため、死体を使用する事がある。墮胎された胎児の組織を使つて、医療の研究をするための連邦基金にお金を出す事にすらもう慣れてしまつていて。これは最近クリントン大統領が前任者とは逆の立場をとつて行政上の命令で可能にした法案である。なぜ、人は皆この最新の医療の革新に恐怖を感じているのだろうか。一つ考えられる理由は、通常ドナーは、自分の器官を差し出す前にドナー自身の同意が必要であり、もし本人が生存して

いなかつたとしたら、少なくとも近親者の同意が必要とされるからであらう。胎児には同意する事もできない。しかし不思議な事に、胎児の脳をパーキンソン病の治療に使う事にはさしたる障害になつていないようだ。人の遺伝学上の身体の寄贈は重大な意味のある事であり、それ故、同意がとりわけ不可欠である。

必要とする人々に余すことなく供給するためにのみ妊娠を考える事について話しているかもしれない。そしていつかは、胎児を培養して成長させる事が機械で出来る日が来たら、そついった目的のためにのみ、胎児を育てる養殖場のような物が出来るかもしれない。

しかしながら、中絶に抵抗を感じない人々さえ、この実現しそうなクローン人間再生じみた行為に不快感を募らせずにいられないだろう。ポストン大医学部で法律及び医学と倫理学の責任者であるジョージ・アナス氏は、この研究のもたらすところを、あまりにグロテスクすぎると本当だと思えない」ともらしている。又、墮胎された胎児の遺骸を他の医療研究に日常的に使用し

死んだ人間から別の生命を取り出すという考え

死んだ人の器官を利用して生きている人に役立つ行為に制限はない。あらゆる科学目的のため、死体を使用する事がある。墮胎された胎児の組織を使つて、医療の研究をするための連邦基金にお金を出す事にすらもう慣れてしまつていて。これは最近クリントン大統領が前任者とは逆の立場をとつて行政上の命令で可能にした法案である。なぜ、人は皆この最新の医療の革新に恐怖を感じているのだろうか。一つ考えられる理由は、通常ドナーは、自分の器官を差し出す前にドナー自身の同意が必要であり、もし本人が生存して

いなかつたとしたら、少なくとも近親者の同意が必要とされるからであらう。胎児には同意する事もできない。しかし不思議な事に、胎児の脳をパーキンソン病の治療に使う事にはさしたる障害になつていないようだ。人の遺伝学上の身体の寄贈は重大な意味のある事であり、それ故、同意がとりわけ不可欠である。

必要とする人々に余すことなく供給するためにのみ妊娠を考える事について話しているかもしれない。そしていつかは、胎児を培養して成長させる事が機械で出来る日が来たら、そついった目的のためにのみ、胎児を育てる養殖場のような物が出来るかもしれない。

しかしながら、中絶に抵抗を感じない人々さえ、この実現しそうなクローン人間再生じみた行為に不快感を募らせずにいられないだろう。ポストン大医学部で法律及び医学と倫理学の責任者であるジョージ・アナス氏は、この研究のもたらすところを、あまりにグロテスクすぎると本当だと思えない」ともらしている。又、墮胎された胎児の遺骸を他の医療研究に日常的に使用し

死んだ人間から別の生命を取り出すという考え

死んだ人の器官を利用して生きている人に役立つ行為に制限はない。あらゆる科学目的のため、死体を使用する事がある。墮胎された胎児の組織を使つて、医療の研究をするための連邦基金にお金を出す事にすらもう慣れてしまつていて。これは最近クリントン大統領が前任者とは逆の立場をとつて行政上の命令で可能にした法案である。なぜ、人は皆この最新の医療の革新に恐怖を感じているのだろうか。一つ考えられる理由は、通常ドナーは、自分の器官を差し出す前にドナー自身の同意が必要であり、もし本人が生存して

いなかつたとしたら、少なくとも近親者の同意が必要とされるからであらう。胎児には同意する事もできない。しかし不思議な事に、胎児の脳をパーキンソン病の治療に使う事にはさしたる障害になつていないようだ。人の遺伝学上の身体の寄贈は重大な意味のある事であり、それ故、同意がとりわけ不可欠である。

必要とする人々に余すことなく供給するためにのみ妊娠を考える事について話しているかもしれない。そしていつかは、胎児を培養して成長させる事が機械で出来る日が来たら、そついった目的のためにのみ、胎児を育てる養殖場のような物が出来るかもしれない。

しかしながら、中絶に抵抗を感じない人々さえ、この実現しそうなクローン人間再生じみた行為に不快感を募らせずにいられないだろう。ポストン大医学部で法律及び医学と倫理学の責任者であるジョージ・アナス氏は、この研究のもたらすところを、あまりにグロテスクすぎると本当だと思えない」ともらしている。又、墮胎された胎児の遺骸を他の医療研究に日常的に使用し

死んだ人間から別の生命を取り出すという考え

死んだ人の器官を利用して生きている人に役立つ行為に制限はない。あらゆる科学目的のため、死体を使用する事がある。墮胎された胎児の組織を使つて、医療の研究をするための連邦基金にお金を出す事にすらもう慣れてしまつていて。これは最近クリントン大統領が前任者とは逆の立場をとつて行政上の命令で可能にした法案である。なぜ、人は皆この最新の医療の革新に恐怖を感じているのだろうか。一つ考えられる理由は、通常ドナーは、自分の器官を差し出す前にドナー自身の同意が必要であり、もし本人が生存して

いなかつたとしたら、少なくとも近親者の同意が必要とされるからであらう。胎児には同意する事もできない。しかし不思議な事に、胎児の脳をパーキンソン病の治療に使う事にはさしたる障害になつていないようだ。人の遺伝学上の身体の寄贈は重大な意味のある事であり、それ故、同意がとりわけ不可欠である。

必要とする人々に余すことなく供給するためにのみ妊娠を考える事について話しているかもしれない。そしていつかは、胎児を培養して成長させる事が機械で出来る日が来たら、そついった目的のためにのみ、胎児を育てる養殖場のような物が出来るかもしれない。

しかしながら、中絶に抵抗を感じない人々さえ、この実現しそうなクローン人間再生じみた行為に不快感を募らせずにいられないだろう。ポストン大医学部で法律及び医学と倫理学の責任者であるジョージ・アナス氏は、この研究のもたらすところを、あまりにグロテスクすぎると本当だと思えない」ともらしている。又、墮胎された胎児の遺骸を他の医療研究に日常的に使用し

死んだ人間から別の生命を取り出すという考え

死んだ人の器官を利用して生きている人に役立つ行為に制限はない。あらゆる科学目的のため、死体を使用する事がある。墮胎された胎児の組織を使つて、医療の研究をするための連邦基金にお金を出す事にすらもう慣れてしまつていて。これは最近クリントン大統領が前任者とは逆の立場をとつて行政上の命令で可能にした法案である。なぜ、人は皆この最新の医療の革新に恐怖を感じているのだろうか。一つ考えられる理由は、通常ドナーは、自分の器官を差し出す前にドナー自身の同意が必要であり、もし本人が生存して

いなかつたとしたら、少なくとも近親者の同意が必要とされるからであらう。胎児には同意する事もできない。しかし不思議な事に、胎児の脳をパーキンソン病の治療に使う事にはさしたる障害になつていないようだ。人の遺伝学上の身体の寄贈は重大な意味のある事であり、それ故、同意がとりわけ不可欠である。

必要とする人々に余すことなく供給するためにのみ妊娠を考える事について話しているかもしれない。そしていつかは、胎児を培養して成長させる事が機械で出来る日が来たら、そついった目的のためにのみ、胎児を育てる養殖場のような物が出来るかもしれない。

しかしながら、中絶に抵抗を感じない人々さえ、この実現しそうなクローン人間再生じみた行為に不快感を募らせずにいられないだろう。ポストン大医学部で法律及び医学と倫理学の責任者であるジョージ・アナス氏は、この研究のもたらすところを、あまりにグロテスクすぎると本当だと思えない」ともらしている。又、墮胎された胎児の遺骸を他の医療研究に日常的に使用し

死んだ人間から別の生命を取り出すという考え

死んだ人の器官を利用して生きている人に役立つ行為に制限はない。あらゆる科学目的のため、死体を使用する事がある。墮胎された胎児の組織を使つて、医療の研究をするための連邦基金にお金を出す事にすらもう慣れてしまつていて。これは最近クリントン大統領が前任者とは逆の立場をとつて行政上の命令で可能にした法案である。なぜ、人は皆この最新の医療の革新に恐怖を感じているのだろうか。一つ考えられる理由は、通常ドナーは、自分の器官を差し出す前にドナー自身の同意が必要であり、もし本人が生存して

いなかつたとしたら、少なくとも近親者の同意が必要とされるからであらう。胎児には同意する事もできない。しかし不思議な事に、胎児の脳をパーキンソン病の治療に使う事にはさしたる障害になつていないようだ。人の遺伝学上の身体の寄贈は重大な意味のある事であり、それ故、同意がとりわけ不可欠である。

必要とする人々に余すことなく供給するためにのみ妊娠を考える事について話しているかもしれない。そしていつかは、胎児を培養して成長させる事が機械で出来る日が来たら、そついった目的のためにのみ、胎児を育てる養殖場のような物が出来るかもしれない。

結婚していないカップルのため

「なぜ私達は婚前交渉を抑えられないのでしょうか。」

私達の文化は性的な情報で満ちあふれており、道徳的な境界線はほとんど保たれていません。禁欲を支持する人はほとんどいなくて、禁欲を抑制的で不健康なものだと考える人もいます。いったん性交渉をもつと情欲はコントロールできなくなり、禁欲は不可能になると、たいいていの人か思っています。この文化的なプレッシャーが仲間とうまく合わせていきたくて思っている若者達の禁欲を難しくしているのです。大勢の人が婚前交渉を抑えられないことをわかつているのです。

という安心感は壊れてしまい、多くの人々が孤独を味わっています。相手を讚えることや、親しい関係や、必要とされているという思いは多くの人達の生活に欠けています。セックスはこの人間にとってまさに必要なものを一時的に代用しているように思われます。不幸にもこれらと出会ったことが、人をより孤独にさせ、困惑させ、妊娠させかねないのです。

結婚していないカップルが一度性交渉を持つと、セックスが二人の関係の中心になる傾向があります。性的な悦びによって二人の間の問題は履い隠され、そのままの関係が続くことがあるのです。この関係の結果、女性は結婚していないのに妊娠し、やがて、子どもができて、自分達がうまくやっていけない事実にも直面するのです。お互いにほとんど話し合うことのできないカップルもいます。協力はとても難しく、二人の生活が本当にやっていけないのです。

二人の関係がお粗末なときでも、その結婚してないカップルは性欲をコントロールできないことの上に、さらに、肉体的かつ感情的な絆を結んでしまっているのです。子どもがもう一方の親をしきりに思い出させるのです。子どもと会う時に、二人で自分達の造った子どもにもとれながら、平和な時間を過ごすことができるのです。しばしば結婚してないカップルが二人目の子どもをみごもったことの原因になることですが、このようなときにセックスに陥りやすいのです。

結婚していないカップルは性衝動において見られる、別のさしせまった問題に直面します。母親あるいは父親は家庭で共に暮らす相手を求め、大事な時間を分かち合い、家族という形態を作りたがりです。避妊や中絶はこういう結果になることを防ぐことはできなかつたのです。結婚してないカップルの大半が避妊具を使っていたり、妊娠よりも優先して中絶を行なっていたのです。

結婚してないカップルは自制心を働かせるためにはどのような行動をとっていけばよいか知っています。彼らは貞潔の枠組みの中で行なわれる禁欲は、冷静さや自信や、より良い親になることや、そして最終的には結婚につ

ながることを十分知っています。

若者がひとたび貞潔を身につけるようになれば、彼らはもはや流されることなく、彼らの生活を自分でコントロールできるようになるでしょう。

Celebrate Life 7-8/95

2月

Pro Life Hero

HEROの記事を書く締め切りが近づいた日、夜の電話で失礼かなと思いつながら高槻市にお住いの渡辺厚美さんにインタビューをお願いしました。

彼女は30才で準看護婦になられた。看護学校で中絶を実習単位としてとらなければならぬのだが、その時、優生保護法に強い疑問を抱いたとおっしゃる。中絶で胎児の生命を奪うのは実際に中絶を行う医師のみの責任ではなく、その準備や介護、そして、その後始末をする看護婦にも大いに責任があると最初看護婦さん達に働きかけたが、ほとんどの看護婦さん達は胎児の痛みを感じることがなく、責任を感じていないように思えたので、今は知っているお

医者さん達に優生保護法廃止のために立ち上がって下さいとお願いの手紙を書いて下さっています。

未熟児を助けようとする小児科医へはプロ・ライフのはずだと、アウシュビッツの再現を許してはいけないと精神科医へ、そして、外科医には脳死患者の臓器移植の法の前にこの優生保護法の問題を先に解決すべきだと。

彼女は最後に、「これは、日本人として生まれてくるはずだった一億の子どもの弔い合戦なのよ。もし、天命があるとすれば、私は看護婦になるために生まれてきたのではなく、この優生保護法終止符を打つために生まれてきたのだと思っているけれど、笛吹けども、踊らずでね。」と言われた。

(大岡滋子)